

(図1) 渋川市の人口推移



(図2) 出生数と死亡数の推移



(図3) 転入者数と転出者数の推移



渋川市における人口減少の状況

本市の人口を合併前の6市町村の合計で見ると、総人口は平成7年の9万1162人をピークに、減少に転じています(図1参照)。

人口減少の主な要因としては、出生数よりも死亡数が多くなることによる「自然減」と、転入者数(市内に入ってくる人)よりも転出者数(市外に出て行く人)が多くなることによる「社会減」があります。渋川市は、平成9年から社会減が続き、平成14年からは自然減も続いていきます(図2・3参照)。

図2から分かるように、平成14年以降、出生数と死亡数の差は拡大しており、自然減が顕著となっています。一方で、図3の転入者数と

転出者数の推移では、令和元年付近からその差が縮小してきており、令和4年には転入者数のほうが多くなる「社会増」に転じました。

転入者数の増加は、東京圏からの移住者や、外国人が近年増加傾向にあることが主な要因ですが、社会増よりも自然減の方が大きく、全体的には依然として人口減少の傾向にあります。

**人口減少が
このまま続くと…**

国立社会保障・人口問題研究所(社人研)が令和5年に発表した人口推計によると、本市の人口減少は今後も続き、2060年には約3万6千人と現在の半分にまで減り、およそ2人に1人が65歳以上になると見込まれています(図4参照)。

(図4) 渋川市の人口と高齢化率の推計



このままのペースで人口減少や少子高齢化が進むと、利用者の減少によりお店がなくなったり買い物が不便になる、公共交通の維持が困難になる、自治会など地域コミュニティの機能が低下するなど、さまざまな影響があります。

さらには、事業者の撤退や働き手の減少による税収

減により、市の「予算不足」も懸念され、これまでと同じような行政サービスや施設、道路、水道などのインフラの維持が困難になっていくことが考えられます。

今後想定されるこのような状況の中でも希望を持ち、次世代を担う子どもたちが生き生きと暮らしている社会を実現するために、私たちに何ができるのか考えていかなければなりません。

《特集》このまち 渋川市をなくさない。

— しぶかわの未来を共に考え、共に創る —



市は、今年度合併20周年の節目を迎えます。

平成18年2月に新たな渋川市が誕生した当時、8万7,535人(平成18年2月末現在)であった人口は、令和7年3月末現在、7万1,762人と、1万6千人近く減少しています。

全国的にも人口減少が続いていく中で、どうすればまちの活力を維持し、市民の皆さんが幸せを実感できるまちにできるかということが、市が直面する最重要課題の一つです。

この特集では、人口減少社会において、本市の未来をどのように描いていくかを考えていきたいと思っています。

詳しくは、政策戦略課(TEL 8554)へ。

このまち 10年後の渋川市が どんなまちでいてほしいですか？



今後、さらなる人口減少に直面する中で、渋川市はどんなまちを目指していくべきなのでしょう。
今回、「子育て世代」、「移住者」、「高校生」、「外国人住民」というさまざまな立場の人に、
「10年後の渋川市がどんなまちでいてほしいですか」という内容でインタビューを行いました。

「若者のやりたいことが実現できるまちに」



片桐 静流さん(左)
石田 明日美さん(右)

片桐さんは、「高校生が活躍できる場があるのはうれしい」、石田さんは、「『よはく』の活動参加が自分の成長につ



▲「ユースセンターよはく」での会議の様子

渋川女子高等学校3年生の片桐さんと石田さんは、高校生の学校以外の居場所として令和6年4月にオープンした「ユースセンターよはく」で活動するメンバー。今年3月には、メンバーが中心となつて、市内4校の高校合同説明会を企画・運営し、多くの小中学生や保護者が訪れ、好評を博しました。

「子どもが希望する進路を選ぶまちに」



▲子育て支援総合センターで遊ぶ川村さん親子

今年1月に、ご主人とお二人のお子さんと家族4人で、埼玉県春日部市から本市に転入した川村さん。ご主人の勤務先の都合と、自然が豊かで子育てがしやすい場所だと思つたことが渋川市を選んだ理由だと話してくれました。渋川市の印象は、「普段スーパで子どもを連れて買い物していると、おじいちゃん・おばあちゃんが気軽に声をかけてくれるので、地域のつながりが強い場所だと感じます」と語る川村さん。



川村 詩菜さん(右)
珠々晴ちゃん(左)

(図1) 市における15歳以下の年齢別人口
(出典：住民基本台帳(令和7年3月末現在))



一方で、転入した時期と保育園の入園手続きの時期が合わず、お子さんの入園が思うように進まなかったという経験から、「保育園にも転入者に備えた枠があるとうれしい」という意見もいただきました。これからの渋川市に対する思いについては、「子どもが成長していく上で、さまざまな世代の人とつながっていけたら」、「今は保育園や小学校くらいまでしか考えられませんが、今後子どもが希望する進路を渋川から選んでいけたらいいと思います」と話してくれました。

(図3) 中高生における将来の本市への居住意向
(出典：令和6年度中学生・高校生意識調査)



「言葉や文化の壁がないまちに」



▲レストランKEIの厨房に立つカイ ケイさん

まちなか(辰巳町)で「レストランKEI」を営む、中国出身のカイ ケイさん。平成12年に日本語を勉強するために来日し、ご主人の転勤に伴って、平成25年から渋川市で暮らしています。渋川市移住後は、国際交流協会の通訳ボランティアや料理教室の講師として活躍され、「地域の人が集まって交流できる場所をつくりたい」という思いから、令和4年にお店をオープンしました。「渋川市は環境も人も良く、



カイ ケイさん



小野口 カナメさん

「新たなことに何度でも挑戦できるまちに」



▲工房で制作を行う小野口さん

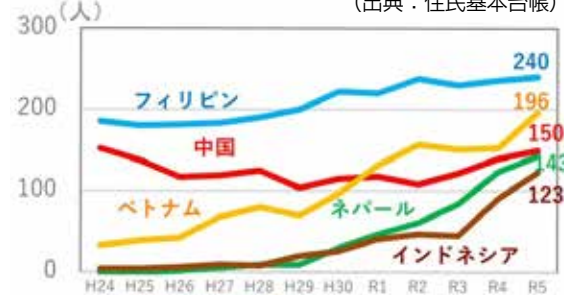
赤城町津久田在住の小野口さんは、11年前に奥様と二人で、神奈川県横浜市から渋川市に移住しました。空き家となつていた古民家と蔵を改修し、ご自身のガラス工房と奥様の帽子の工房「六箇山工房」を、後に移住してきた二人の仲間たちと営んでいます。「人よりも自然があるまちがほっとする」という小野口さん。「ここから見える山々の眺めが素晴らしい、昔からの景色に力を感じられることがこの場所を選んだ理由で

す」と話してくれました。また、「地元の人には当たり前のもので、移住者には貴重。新しいものはどこにでもありますが、このまちにしかない歴史が楽しい」と、移住者ならではの視点で渋川の魅力を感じている様子。これからの渋川市については、「平沢川が前橋の広瀬川のように、人が集まる場所になれば」、「お店を出せる場所がもっと増えたら」、「多様なことを始める人を支援して、何度でもチャレンジできるまちになれば、もっと市外から人が来るまちになるはず」と提案してくれました。

(図2) 市への移住相談件数と移住者数の推移
(出典：市民協働推進課集計)



(図4) 国籍別外国人住民数の推移
(出典：住民基本台帳)



町内の皆さんに受け入れてもらって、いつも助けてもらっています。その恩返しとして、言葉や生活に困っている外国人の相談など、自分ができるところを続けていきたいです」と語ってくれました。カイさんは、「日本に来て一番苦労したのは言葉の問題」だったという中で、「もっと日本語教室の受け皿を増やして、言葉の壁をなくすことが必要です」と指摘してくれました。また、「ごみの捨て方や日本の文化を学べる機会があれば、地域住民とのトラブルもなくなると思います」と提案してくれました。



地域経済の専門家が提言

ー人口減少社会に立ち向かうカギは「住民幸福度」の向上ー

専修大学 経済学部 ^{かわとう}河藤 佳彦 教授

渋川市まち・ひと・しごと創生検討会議会長 / 渋川市中小企業振興会議委員長

私たちが住む日本は、人口減少が急速に進んでいます。この厳しい現実のなかで人々が幸福に生きていくためには、二つのことが重要になると考えられます。

一つは、働き手一人一人が生み出す経済的価値を増やし、個人が経済的豊かさを享受できることです。そのためには、事業者が技術革新や経営革新、市場の開拓や創出などに積極的に取り組むこと、おのおのの働き手が希望する職を得て経済的豊かさを享受できることが求められます。

もう一つは、全ての人々が心の豊かさを実感できる社会を構築することです。その実現には、災害に強い安全・安心なまち、子育てを安心してできるまち、また、若者から高齢者までのあらゆる世代が、交流・協働することで生きがいを持って暮らせる社会の構築などが求められます。これら二つのことを、急速に発展するデジタル技術の積極的な活用により促進することも、とても重要なことです。

渋川市は、多くの優位性を擁しています。『第2次渋川市総合計画』では、「起伏に富んだ豊かな自然」、「泉質の異なる魅力的な温泉」、「豊富な水資源を生かした工業、山地の開拓による農業」、東京都心まで「高速道路利用で約2時間」、「新幹線利用で約1時間10分」などと紹介しています。このような優位性を効果的に活用できれば、渋川市民の幸福度は高まります。また、ライフスタイルや働き方の多様化、デジタル技術の発展などによる人々の居住地域や企業・オフィス立地の拡大の潮流も取り込むことができます。

渋川市は、地域の優位性を生かし、社会経済情勢の変化を取り込むことや、心の豊かさが実感できるまちづくりに取り組むことなどにより、市民が幸福を実感できるまちを創造できます。また、市外の人々や事業者にも魅力的な地域となり、人口減少社会においても質の高い発展が期待できます。その実現には、行政、事業者、諸団体、そして市民がそれぞれの強みを持ち寄り、協働・連携して取り組むことが強く望まれます。

しぶかわの未来を共に考え、共に創るために。

市は、人口減少社会においても、将来にわたって活力ある地域であり続けること(=地方創生)を目指すため、今年3月に「しぶかわ未来共創プラン(第3期 渋川市総合戦略)」を策定しました。

「第3期」とあるように、市はこれまでも子育て支援や移住定住の推進などを中心に、地方創生を推進するための取り組みを平成27年度から10年間にわたり進めてきました。今回の計画では、新たにデジタル活用の視点を盛り込むとともに、ワークショップやイベントでのアンケートなどを通じて、市民の皆さんからいただいたさまざまなご意見を踏まえ、本市の未来を見据えた取り組みを位置づけました。

人口減少は、渋川市だけの問題ではなく、一朝一夕に解決できるものではありません。しかし、このまちに対する思いを皆さんと共有し、どうしたらよりよい未来を実現できるのか、一緒に考え、一緒に取り組んでいくことで、少しずつこのまちが変わっていくのではないのでしょうか。

未来を生きる子どもたちが幸せでいられるように、このまちがずっと、私たちのかけがえないふるさとであり続けるために、しぶかわの未来を共に考え、共に創っていきましょう。



▲「しぶかわ未来共創プラン」の詳細はこちら

渋川市の未来のために、あなたの「声」を聞かせてください

あなたは、10年後の渋川市がどんなまちでいてほしいと思いますか。

どうすればその理想に近づけることができるでしょうか。

市は、市民の皆さんとの対話によるまちづくりを進めるため、「市民ワークショップ」と「地区別シンポジウム」の2つの事業を開催しています。

また、本市の人口減少対策等に関する取り組みについて評価などを行う「渋川市まち・ひと・しごと創生検討会議」の市民委員を募集します。

市の未来のために、皆さんの意見を聞かせてください。



しぶかわ未来共創カフェ (市民ワークショップ)



5人程度のグループに分かれて、テーマに沿って対話を行うワークショップです。計4回開催します(1回のみ参加も可能)。



とき・ところ・テーマ 下表のとおり

対象 市内に在住・在勤・在学している人

申込方法 右上の応募フォームまたは電話で政策戦略課(☎8554)へ

	とき	ところ	テーマ
①	5月31日(土)	午前10時～正午 市役所本庁舎	子育て支援 教育環境の充実
②	6月7日(土)		交流人口の拡大 移住・定住の促進
③	6月21日(土)		働く場の確保 農林業の活性化
④	6月28日(土)		安心なまちづくり 行政DX・官民共創

しぶかわ未来共創セッション (地区別シンポジウム)



人口減少社会におけるさまざまな課題や市の現状を参加者と共有し、意見交換を行うミニシンポジウムを市内各地区で開催します。



とき・ところ 下表のとおり

対象 どなたでも

申込方法 右上の応募フォームまたは電話で政策戦略課(☎8419)へ

	とき	ところ
①	5月30日(金)	午後6時～7時30分 渋川公民館
②	7月8日(火)	豊秋公民館

※これ以降も、市内各地で開催する予定です

渋川市まち・ひと・しごと創生検討会議の 市民委員を募集します



渋川市まち・ひと・しごと創生検討会議は、市の人口減少対策等に関する取り組みの成果や、事業の効果検証などについて、市民や産業・教育・金融・労働などのさまざまな分野の人から意見を聴くための組織です。今年度の委員改選に伴い、新たな市民を募集します。

募集人数 1人

任期 2年(7月1日～令和9年6月30日) ※再任を妨げない

会議 必要に応じて開催(年2回開催予定)

報償 日額6,100円



▲会議の様子

応募資格 次の①～⑤の全てに該当する人

- ①応募日において満18歳以上で、市内に住所があり、今後も渋川に住む予定がある
- ②国や地方公共団体の議員または常勤の職員でない
- ③市の他の附属機関などの委員になっていない
- ④市の発展のため建設的で前向きな意見を発言できる
- ⑤平日の昼間に開催される会議に参加できる

※託児サービスも利用できます

応募方法 右上の応募フォームから、必要事項と応募の動機(400字以内)を記入の上、申し込んでください

応募期限 5月23日(金)必着

決定方法 選考により決定

※選考結果は、応募者全員に文書で通知します
詳しくは、政策戦略課(☎8554)へ。